編集後記

記念すべき第１回社会鍼灸学研究会が、梅雨明けの待ち遠しい2006年７月17日、筑波技術大学にて開催された。当日は朝から雨模様で、なかなか出席予定者が集まらず、立ち上げあげからのここまでの準備に何らかの不備があったのかもしれないと、私は一人で不安と緊張の間を往来していた。

本研究会は、2002年、当時の筑波技術短期大学において研究生（千葉県特殊教育長期研修生）として形井研究室に在籍し、研究の一歩を踏み出した頃から教授と温めてきた計画であった。鍼灸（東洋医学）の医学を超えた深さと広がりという魅力を知れば知るほど、私の興味関心は、日本鍼灸の出自と変遷、現代日本鍼灸の社会的なスタンスや位置に収斂しつつあった。約20年来、折に触れて助言を受けていた形井教授に正式に指導をうける機会を得たことで、社会鍼灸学へ一縷の可能性を見いだすことができたのである。私の興味関心を引き出して頂き、教授自身が以前から研究を進めていた研究分野であり、まだ曖昧な学問領域だが研究を推進しなければならない分野であることをディスカッションを重ねて確認、確証しつつ、そろそろ計画を実現させる蛮勇が必要になっていた。

鍼灸関係の学会や研究会では、社会学的なセッションは散発的であり、それまでのシンポジウムでは物足りず、形井教授は日頃から10年で解散する鍼灸の社会学的な研究会の必要性を説き、既に数年前から青写真を抱いていた。しかし、周知の通りの教授の多忙さと素質（？）から計画段階でのディスカッションに時間を要し、なかなか実現しない日々が続いた。当初は、二泊三日程度合宿して、日頃の学会での物足りなさを発散すべくラウンドテーブルディスカッションすることを計画していたが、諸般の事情で実現せず、一日の実施ではあるがなんとか開催へ漕ぎ就いたという経緯である。教授は相当慎重で、プレス関係は一切呼ばず、学内へも殆ど告知せず、ある出席者からは「まるで密室での会議であった。」と揶揄されるほどであった。徐々に密室を抜けだし、会議室での研究会に格上げしつつあるが、公に曝すという行為にはまだ及んでいない。

本研究会にて、斯界の名だたる講師陣がそれまで各方面で発言されていた鍼灸の社会学的なものをここに集約できたことはまさにそれまでの教授の尽力による功績が大きい。また、特に第１回は、福岡地裁判決について言及されていた福岡大学の屋宮憲夫教授が法学部長という職務の超多忙にも拘わらずご出席を快諾されたことも、第１回目の記念すべき会に大きな柱を立てて頂いたと感謝している次第である。法律学分野で権威のある先生が、第三者の立場で鍼灸界をどのように達観されたかは本論文と討論から察して頂きたい。

当日、出席された複数の先生方から、嚆矢としての本研究会と継続の意義が強調され、当初の目的は達成されたが、身の引き締まる思いと同時に継続しなければという重い課題も頂いた。第２回以降の研究会へ第１回の内容を反映させるべく努力も忘れてはならないと思っている。

編集作業などは初体験で、おそるおそる本編集を行ったが、編集を進めるほどに社会へ上梓できる質と内容であることを教授と共に確証した。この分野は日本鍼灸界において決してメイジャーとは言い難く、議論が空回りすることもしばしば経験してきたが、心ある先生方から力強い支持を頂くことで勇気づけられてきた。本報告集の見苦しい紙面や、レイアウトの不備、時間を割いて討論した割には掲載できる部分が十分でなかったことをお許し願いたいと思う。

当日オブザーバーで出席され、参考になる意見を頂いた諸先生方を下記に挙げ、この場で再度感謝を申し上げます。(敬称略)

矢野忠、松田博公、津嘉山洋、和田恒彦、藤原自雄、小野直哉

また、事前準備から当日の接待まで協力してくれた、筑波技術大学附属東西医学統合医療センターの研修生の皆さん大変ご苦労さまでした。有り難うございます。

第2回の研究会(2007,7/29)の実施を目前にした7月中旬、台風4号や中越沖地震と続く不穏な日本、梅雨明けの見通しの立たない関東地方、曇天の千葉船橋で。

箕輪 政博